

受診のハードル下げ

地域とつながる精神科

広島県西部の精神科の基幹病院である「こころホスピタル草津」(広島市西区)。90年以上の歴史を持つ「草津病院」が、8月に名称を変更した。合わせて新棟もオープン。受診のハードルを下げるとともに、来院を待つだけでなく、支援が必要でも「助けて」と言えない人とつながる医療を目指す。

(鈴木大介)



こころホスピタル草津が新たに整備した本館

「治療を必要としていて受診に至っていない人が地域にたくさんいると気付かされた」。佐藤悟明院長(55)は、2018年の西日本豪雨を振り返る。災害派遣精神医療チーム(DPAT)の一員として被災地に入ると、精神疾患を患い、避難所に行けずに壊れた自宅に残っていた人たちの姿

新棟オープン 相談機能が充実

があつたという。普段目立たない問題が、災害時に表面化していた。

安全確認や診察をしようとして地域を回ったが、「草津病院から来ました」と言う。精神科への抵抗感からかほとんどのケースで拒絶された。「口頭から関わっていなければ、本当に支援が必要なきに助けられない。

医療福祉相談室 TEL 082(277)1399
■ 外来受診や入院について
■ 医療費や生活に関する各種制度について

広島市西部認知症疾患医療センター
TEL 082(270)0311
■ 精神保健福祉士による認知症に関する相談対応など

年「草津病院」の名を掲げてきた。名称変更は、地域に開かれた病院に向けた新たな一歩という。山手寛文事務部長(52)は「やわらかく優しい印象を意識した。困ったときにちよつと受診してみようかと思つてもらえるような病院になれば」と話す。

新たに整備した本館の3階には「地域支援センター」を置いた。医療福祉相談室や地域連携室などの機能を充実させ、患者や家族が立ち寄りやすとした。

またこの階には、精神保健福祉士や作業療法士ら多職種が集まる。1人の患者に対して病気の治療だけでなく、退院後の就労や家族との関係づくり、必要な行政サービスの情報提供など生活面のサポートも一層強化するという。地域住民も会議や講演会で利用できる多目的ホールも設けた。

佐藤院長に聞く

なぜ名称を変えたのですか。

精神科医療への受診のハードルを下げるには、まずは親しみやすい名前に変えないといけないと考えた。閉鎖病棟のイメージが強く、受診の抵抗感は今もあると思う。地域でも近寄りがたいと思つている人もいるだろう。私は地元で生まれ、病棟に入つて患者さんに遊んでもらつて育つてきた。地域の人の印象と、私が接していた患者さんとのギャップが大き。

患者だけでなく家族も支援

名称のほかに、病院を身近に感じてもらつたための具体的な取り組みはありますか。

地域の皆さんとの連携を強めた。自宅がごみ屋敷だったり、近所トラブルを抱えていたりする人の中には、病気の自覚が薄いケースがあり、周囲も困つている可能性がある。1度受診しても継続しない。そういった人もフォローできる体制を整える必要がある。普段から見守つている地域の支援者や民生委員とし

これからの精神科医療で大切なことは何ですか。

家族全体を支援する視点が重要になると思う。最近では、高齢の親と中高年の子が孤立する「8050問題」が目立ってきている。未治療の子を世話していた親が認知症になり体力が落ちたりして入院すると、子の生活が難しくなる。早い段階から関わり、いざというときに受診や相談ができるバックアップ機能としての医療施設でありたい。

つかりコネクションをつくつて、治療や支援につなげていきたい。

広島県西部の基幹病院「こころホスピタル草津」に名称変更



「精神科医療への理解を広げていきたい」と話す佐藤院長